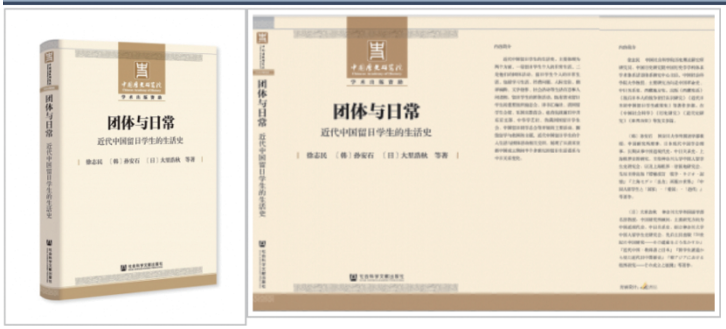
共同研究グループ活動報告（2022 年度）

日中関係史

2022 年度は，対面とオンライン会議を併用しながら研究会を開催した。研究会の記録はすべて http://chineseovers.jugem.jp/ に掲載している。

《团体与日常—近代中国留日学生的生活史》出版信息のお知らせ



社会科学文献出版社，2022 年 8 月刊行予定

また，いままで日本で刊行した論文集の中から関連する論文を選び，『団体与日常：近代中国留日学生的生活史』として刊行することができた（中国・社会科学出版社，2022 年 8 月）。大里浩秋（神奈川大学名誉教授），孫安石（神奈川大学教授），徐志民（中国社会科学院歴史研究員）の 3 名が編者を務めた。以下，本年度に開催した研究会活動を箇条書きで記す。

⑴　第 90 回研究会（2022 年 1 月 29 日）
　①「東京帝国大学の中国人留学生関係文書を読む」大里浩秋（神奈川大学名誉教授）
　②「中国人留学生の日本遊学案内書の系譜を読む」孫安石（神奈川大学）

⑵　第 91 回研究会（2022 年 2 月 26 日）
　①「開戦前夜北京の日本人留学生」 稲森雅子（九州大学　専門研究員）
　②「中華留日基督教青年会について」 渡辺祐子（明治学院大学）

⑶　第 92 回研究会（2022 年 3 月 26 日）
　①「帝国大学における中国人女子留学生」周一川（日本大学）
　②「同仁会と中国人留学生」見城悌治（千葉大学）

⑷　第 93 回研究会（2022 年 5 月 21 日）
　①　書評『日華学堂とその時代：中国人留学生研究の新しい地平』 高田幸男（明治大学）・大里浩秋（神奈川大学名誉教授）・孫安石（神奈川大学）
　②「1920，30 年代中国人日本留学生の管理と生活」 張一聞（明治大学博士課程）

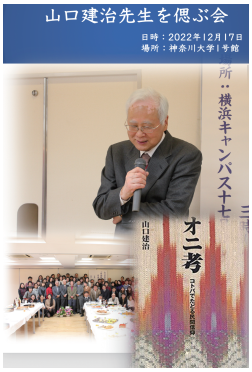
⑸　第 94 回研究会（2022 年 7 月 23 日）
　①「清末陸軍留学生の学習と生活」 木村一樹（東京大学大学院修士課程）
　②「日中戦争と来華日本人」 譚晧（中国・天津大学）

(6)　第 95 回研究会（2022 年 9 月 3 日）
　①「改革開放期中国の留学生政策 ── 鄧小平の役割を中心に」 張少東（大阪大学修士・修了）
　②「日本と南アジアの孔子学院について」 三浦明子（東洋大学非常勤講師）
　コメンテーター・荒川雪（東洋大学教授），白土悟（九州大学総合研究博物館専門研究員）
(7)　第 96 回研究会（2022 年 10 月 8 日）
　①「『中華留学教育史録』にみる中華人民共和国の留学生政策」 川島真（東京大学）
　②「戦後の中国留日同学総会と日共中国人支部との関係を中心に」 荒川雪（東洋大学）
(8)　第 97 回研究会（2022 年 12 月 3 日）
　①　報告「清末の五校特約成立過程の再検討」 胡穎（神奈川大学，非常勤）
　コメンテーター：大里浩秋（神奈川大学名誉教授）

（文責　孫安石）

「山口建治先生を偲ぶ会」

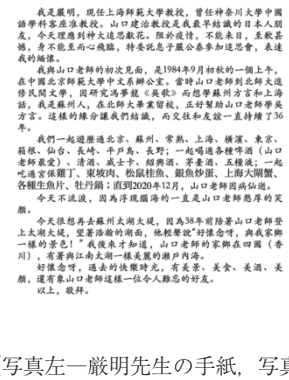
神奈川大学の元理事，元外国語学部長，名誉教授である山口建治先生を偲ぶ会が，2022 年 12 月 17 日，本館の 8 階で開かれた。山口先生は 2020 年 12 月 2 日に逝去されたが，コロナ禍の影響で偲ぶ会の開催は延期をやむなくされ，この度三周忌をむかえ開催になった次第である。



（写真左―偲ぶ会の横断幕，写真右―偲ぶ会の集合写真）

偲ぶ会は，山口先生とともに神奈川大学中国語学科設立に関わった鈴木陽一先生の挨拶から始まり，いまからおおよそ 30 年以上前の 1980 年代に中国語学科を設立するときの様々な秘話が紹介された。

次は中国の上海師範大学の教授で，かつて神奈川大学中国語学科の特任教授を務めた厳明先生からの手紙が在日のご子息公泰さんより中国語と日本語で代読された。そこには中国研究者である山口先生が蘇州の方言を勉強したときの思い出から始まり，山口先生と一緒に語り合った中国の民俗研究の話し，一緒に酌み交わした酒と料理の数々が紹介され，ほのぼのと優しい山口先生を思い出させる内容であった。



我是厳明，現任上海師範大學教授，曾任神奈川大學中國語學科客座准教授。山口建治教授是我最早結識的日本人朋友，今天理應到神戸走恩敷花。但於疫情，不能来日，至歉甚焉，身不能至而心飛揚，特委託息子厳公泰李加送恩會，来達我的緬懷。

我與山口老師的初次見面，是1984年9月初秋的一個上午，在中國北京師範大學中文系辦公室。當時山口老師到北師大進修民間文學，因研究馮夢龍《山歌》而想學蘇州方言和上海話，我是蘇州人，在北師大畢業留校，正好幫助山口老師學吳方言。這樣的緣分讓我們結識，而交往和友誼一直持續了36年。

我們一起遊歷過北京、蘇州、常熟、上海、横濱、東京、箱根、仙台、長崎、平戸島、長野；一起喝過各種啤酒（山口老師最愛）；清酒、威士忌、紹興酒、黄麦酒、五糧液；一起吃過宮保雞丁、東坡肉、松鼠桂魚、鍋魚炒蛋、上海大閘蟹、各種生魚片、牡丹鍋；直到2020年12月，山口老師因病仙逝。

今天不流淚，因為浮現腦海的一直是山口老師慈厚的笑顔。

今天很想再去蘇州太湖大堤，因為38年前陪著山口老師登上太湖大堤，望著浩瀚的湖面，他輕聲說"好懷念呀，與我家鄉一樣的景色！"我後來才知道，山口老師的家鄉在四國（香川），有著與江南太湖一樣美麗的瀬戸内海。

好懷念呀，過去的快樂時光，有美景、美食、美酒、美顔，還有象山口老師這樣一位令人難忘的好友。

以上，敬拜。

（写真左―厳明先生の手紙，写真右―山口ゼミ生）

そのほかに，大阪外語大時代の友人と東北大学時代の友人の皆様からは，1970 年代の日本の学生運動の真っ只中の山口先生と過ごされた青春の思い出が紹介された。

また，山口先生のゼミ生からは，学生の間では，ひそかに「ヤマちゃん」，または「ヤマケン」と，親しみを込めた別称として呼ばれたことや，授業中の指導が厳しく，時には学生を泣かせてしまったエピソードなども紹介された。

（写真左―山口先生の行きつけの福臨門にて，写真右―山口小枝様の織もの記念品）

最後に奥様の山口小枝様（織もの作家）からは偲ぶ会を開催した皆様に対するお礼の言葉と記念品として制作された手作りのブックカバーが渡された（ブックカバーのデザインは，山口先生の研究テーマであったオニをかたどったもの）。

（文責　孫安石）

言語変異研究

1. 今年度の主な研究内容：
   今年度は主に言語景観に関する生態言語学的研究，対照言語史に関する資料調査と執筆活動を行った。
2. 今年度の主な研究成果：
   ①講演活動：
   日本歴史言語学会 2022 年度大会（2022 年 12 月 10 日於・学習院大学）のシンポジウム「日中英独仏・対照言語史 ―― 語彙の近代化をめぐって」において，講演「中国語の語彙近代化と言語生態 ―― 新語の群生と「適者生存」のメカニズム」を行った。

②執筆活動：

単著『都市空間の言語生態 ── 上海の言語景観と道路命名の歴史』（くろしお出版，2023 年 2 月刊行）を完成した。

3. 今年度購入された主な研究所所蔵資料：

『抗日战争期间中日间的宣传战（1937-1945）』

『图像学与中国美术史研究』

『东莞疍民研究』

『中華大蔵経　続編 19～31　漢傳注疏部（二）』

4. 2023 年度は引き続き社会言語学，歴史言語学に関する研究調査を実施する予定である。

（文責　彭国躍）

〈身体〉とジェンダー

1. 講演会・研究会の開催

• 第 1 回研究会

開催日：2022 年 8 月 5 日（月）

会　場：オンライン＆対面（みなとみらいキャンパス 17017）

発表者（所属）：信岡朝子（東洋大学文学部日本文学文化学科）

「狩猟と男性性 ── 北米におけるホワイト・ハンター神話と「存在の大いなる連鎖」

最初に世紀転換期アメリカのセオドア・ローズベルト大統領と熊狩りという，テディベアの起源となったエピソードの内実やイメージの転換が紹介された後，大統領の伝記などに出てくる博物学者や自然保護主義者という人物像が，同時代（金ぴか時代から進歩の時代へ）の思想とのかかわりで分析された。病弱であった幼年期，「女々しい」とも揶揄された過去と，それゆえの男性性の発露の関係が示された後，二つの男性性，manliness と masculinity という概念装置での分析が試みられた。manliness が自制心や抑制を基調とし，弱き存在を守るといった，ある種貴族主義的な姿勢であるのに対して，masculinity は身体的・性的側面が強い男性性で，攻撃的であったり，非白人種や下層階級が持つとされた野蛮さを白人男性が取り込んでいったりしたものであった。前者から後者への移行，さらには両者の関係性を見る必要が指摘された。

そこには文明が過度に進み衰退した白人種が力を取り戻すという歴史観が見られるが，その背景として，ダーウィンの進化論も飲み込むような「存在の大いなる連鎖」という思想があった。そうした視点に沿って，狩猟といった野外活動を重視し，対外的には帝国主義的拡張を進めたシンボルとして，ローズベルト大統領は位置づけられるとまとめられた。また，manliness から masculinity への移行によって，上位人種の「野蛮化」という矛盾が現れるが，それを解消するものとして白人においては男女差が強調され，男性が女性を庇護・管理するように，人間は動物を庇護・管理するという並行関係が強調された。「弱きを助け強きを挫く」といった価値観は，大統領が設立した Boone & Crockett Club に見られるものであり，自然保護と人種主義的エリーティズム，家父長制的価値観の接合を，同時代思潮との関連で読み解いていくことの意義が論じられた。

講演を受け，アメリカという国の歴史と狩猟のかかわりや，女性ハンターの問題，また現代の動物保護思想や大統領との時代を越えたつながりについて議論を行った。グループ外からの参加者も多く，議論が活発に行われた。

• 第 2 回研究会

開催日：2022 年 9 月 16 日（金）

会　場：オンライン＆対面（みなとみらいキャンパス 17017）
発表者（所属）：江崎聡子（聖学院大学人文学部 欧米文化学科 准教授）
「エドワード・ホッパーの女たち」

2022 年春に出版された『エドワード・ホッパー作品集』（東京美術）の著者である江崎聡子氏に，ホッパーというジェンダーという観点から，アメリカ的な画家と言われることも多いホッパーの隠された面について論じていただいた。

ヨーロッパの影響を存分に受け，同時代のアメリカの都市文化に距離をおいていたホッパーが，逆説的に露呈されたアメリカ的なるものについて，女性や労働者，消費文化といった面から考察された。ホッパーにおいてジェンダーや人種，階級を考えることの難しさについても指摘され，ホッパー本人が意識せず，目に入らなかった，あるいは目に入れなかったマイノリティの観点から考えることの意義が議論された。

2. シンポジウムの開催　なし

（ただし，本研究グループに所属する村井まや子氏，秋山珠子氏が中心となって，国際シンポジウム・映画上映会・絵本展「Storied Environments 物語る環境」が，10 月 15 日（土）・16 日（日）にみなとみらいキャンパス 1F 米田吉盛記念ホールで開催された。本シンポジウムでは，ジェンダーや動物性の問題も環境というテーマと関連づけられて議論された。）

3. 活動内容

〈身体〉とジェンダー研究会は『男性性を可視化する ── 〈男らしさ〉の表象分析』を 2019 年度に出版したが，その後に続く企画として，2020 年度から「動物」や「種」とジェンダーの関わりをテーマにした叢書の出版を目指して，学内・学外から多くの新メンバーを集め研究会を組織している。前年度の 2022 年 2 月 18 日に行われた研究会で，動物性とジェンダーの表象を考えることの叩き台が示され，それを受けて，2022 年度も講演・議論を重ねることで叢書の準備を進めていくこととした。

第 1 回研究会では，『快楽としての動物保護 ── 『シートン動物記』から『ザ・コーヴ』へ』（講談社選書メチエ）の著者である信岡朝子氏を招待して，20 世紀初頭のアメリカにおいて狩猟と男性性がどのように関連づけられてきたかをめぐる講演を行ってもらった。

第 2 回研究会では，本研究グループ所属で『エドワード・ホッパー作品集』（東京美術）の著者である江崎聡子氏が，「エドワード・ホッパーの女たち」について発表を行った。視覚芸術とジェンダー，20 世紀アメリカ社会との関連を見ることで，今後の共同研究の基盤を共有した。

第 3 回研究会は，2023 年 2 月あるいは 3 月に開催予定である。

（文責　熊谷謙介）

自然観の東西比較

1. 研究会の開催

第 1 回研究会
開催日：8 月 3 日（水）
会　場：MMC 19 階 19031 教室＋Zoom
発表者（所属）：中村隆文先生（本学国際日本学部日本文化学科）
演　題：「辺境の〈ケルト〉 ── ロゴス化されない自然観を通じた，東西の思想比較 ── 」

第 2 回研究会
開催日：11 月 30 日（水）
会　場：MMC 16 階 16032 教室＋Zoom

発表者（所属）：ブライアン　ルパート先生（本学国際日本学部国際文化交流学科）
演　題：「木が語る中世仏教文化 ── 木像（本尊），御衣木，「草木成仏」の言説を中心に ──」
第 3 回研究会
開催日：12 月 22 日（木）
会　場：MMC 16 階 16032 教室＋Zoom
発表者（所属）：角南聡一郎先生（本学国際日本学部歴史民俗学科）
演　題：「伝承を読み解く素材」

2. シンポジウムの開催
なし

3. 活動内容
今年度は 3 回の研究会を開催した。それぞれ 1 時間程度の発表があり，その後 1 時間半程度，質疑応答などの議論を行った。参加者は Zoom 参加を含め毎回 7 名程度であったが，第 2 回研究会の際には留学生の参加もあり，有益な情報交換がなされた。発表のテーマは，ヨーロッパの〈ケルト〉文化，日本中世の仏教儀礼，民俗学（考古学）における伝承の意義など，時代や地域などが様々であり，自然景観（山・岩・木・海など）をめぐる信仰（キリスト教とそれ以前の基層信仰，日本の神道と仏教）や生活など，自然観をめぐる東西比較のみならず時代による変遷などについても有益で活発な議論が交わされた。

（文責　上原雅文）

ヒト身体の文化的起源

活動なし

日中韓対照言語研究

本研究会は，2020 年度からすそ野を広げ，中国語を加えた形で新しいメンバーも迎え，本格的に「日中韓対照言語研究」をすすめることにした。今後より積極的に取り組んでいきたい。

研究会の開催

⑴　日　時：2023 年 2 月 28 日（火）15：00～17：00（予定）
場　所：Zoom
発表者：尹　亭仁（本学　国際日本学部国際文化交流学科教員）
テーマ：日中韓 3 言語における共通漢語の現状

⑵　日　時：2023 年 3 月 16 日（木）15：00～17：00（予定）
場　所：Zoom
発表者：鈴木　慶夏（本学　外国語学部中国語学科教員）
テーマ：多言語対照研究に向けた中国語からの考察点

年 2 回以上の研究会の開催を計画し，活性化を試みている。対照言語研究の観点から日中韓以外の言語の研究者にも参加を呼びかけている。メンバーによる発表に加え，海外の研究者にも参加と発表を呼びかけている。

（文責　尹亭仁）

各国近代文学の研究

1. 講演会・研究会の開催
   第 1 回研究会
   開催日：2022 年 12 月 26 日
   会　場：ZOOM 開催
   講演者：小澤裕之 氏（早稲田大学）
   演　題：マルシャーク『森は生きている』について
2. 活動内容

本研究グループは，活動 7 年目となる。研究対象の時期的な重なりを基軸に据えながらも，研究をめぐる方法や環境・場の異なりについて相互に意識し，意見交換をしながら，領域横断的な近代文学研究の方向性を模索していく。講演会による講師のレクチャーから多くの知見や刺激を得たことはもとより，さまざまな専門領域，方法論を携えたメンバーによる，それぞれの立場から質疑・意見交換を行い，お互いの知見を深めた。

（文責　松本和也）

知覚認知システムの普遍性と多様性

講演会・研究会の開催：なし
シンポジウムの開催：2 回
The 4th Symposium on Perception and Cognition Systems for Nature of Plausibility
Date and time: Friday, 18 March 2022, 17:00–20:00 (JST)
Venue: The symposium will be held online through Zoom (ID/Passcode will be provided to registered participants).
Language: English
Program

1. Is Chromatic Motion System Lateralized?
   Haruyuki KOJIMA (Kanazawa University)
   Visual psychologists have long assumed, in general, that our visual sensitivity to the visual world is best at the center in the visual field and concentric to the eccentricity, so that it is not biased either to the right or left of the visual field. However, sometimes, studies have reported a-symmetricities in our visual perception, such as color perception and motion perception. The present talk will introduce our study that have investigated hemispheric sensitivity to chromatic motion perception. A series of experiments examined sensitivities of two visual hemifields for isoluminance points, detection thresholds, and motion thresholds with chromatic or achromatic stimuli. We will discuss our experimental results from the points of view of visual pathway as well as visual perceptual mechanism.
2. A Kalman filter model for adaptation to delayed auditory feedback in adults who stutter
   Nobuhiko ASAKURA (Center for Mathematical Modeling and Data Science, Osaka University)
   Sensorimotor integration is crucial for efficient speech production, and its dysfunction may be related to the speech disorder of stuttering. Recent evidence shows a stronger effect of adaptation to delayed auditory feedback (DAF) in adults who stutter than in fluent controls. Here, I present a Kalman filter model of DAF adaptation. This model estimates the delay of auditory reafference by optimally combin-

ing its prediction with the actual sensory measurement of auditory signals. The model predicts that the effects of DAF adaptation become stronger either when the precision of prediction decreases or when the precision of the measurement increases. Fitting the model to behavioral data reveals that adults who stutter are more imprecise in their prediction of reafferent auditory feedback delays, and that the degree of imprecision is correlated with their stuttering severity.

The 3rd Symposium on Perception and Cognition Systems for Nature of Plausibility

Date and time: Tuesday, 22 Febuary 2022, 17:00–19:10 (JST), 8:00–10:10 (GMT)

Venue: The symposium will be held online through Zoom (ID/Passcode will be provided to registered participants).

Language: English

Program: "Music as confluence of perceptual, cultural, and aesthetic plausibility"

1. Effects of beat on the occurrence of the time-shrinking illusion

   Emi Hasuo (Hiroshima University/Japan Society for the Promotion of Science), Yuu Masuda (Taisho University), & Hiroshi Arao (Taisho University)

   Rhythm and beat are both temporal aspects related to perceptual plausibility in music. Rhythm refers to the more 'local' aspect of temporal perception, and is said to be based on the durations of neighboring time intervals between successive sounds. Beat, on the other hand, refers to a more 'global' aspect of temporal perception, and is a sense of steady pulse in a sound sequence. Although rhythm and beat are potentially related, they have been conventionally considered as distinct time structures that engage different perceptual processes. Here, we focus on an illusion in rhythm perception ('local' time perception) called "time-shrinking", and examined whether the occurrence of this illusion is influenced by beat ('global' context). Experiments showed that time-shrinking is diminished when the beginning of the time-shrinking pattern does not coincide with the beat induced by the preceding sounds, suggesting a clear influence of beat ('global' context) on rhythm perception ('local' time perception).

2. How do we acquire the sense of culture-specific musical plausibility?

   Rie Matsunaga (Kanagawa University)

   Similar to the language-syntactic schemas, listeners implicitly acquire the music-syntactic schemas (related to keynote and musical scale) through mere exposure to their native music. The music-syntactic schemas underlie the sense of melodic Gestalt (including melodic coherence, well-formdness, and plausibility) for pitch structure of music. In this talk, I start with explaining what music-syntactics schemas adult listeners have in their brains and the extent to which listeners from different cultures are similar in the sense of melodic Gestalt. Then, I introduce my computer simulation work that reveals how children rapidly start off learning the culture-specific schemas in spite of no direct or explicit teacher signals about the keynote and scale of each musical piece.

3. Understanding audience effects in musical performance

   Haruka Shoda (Ritsumeikan University)

   In the Western art tradition, musical performance is intended to deliver the performer's own artistic/musical interpretations to the audience. The performer manipulates musical sounds (i.e., motor control) by regulating their psychophysiological states to achieve this purpose. In the presence of an audience, the performance sometimes sounds better (social facilitation) and at other times sounds worse (social inhibition). In this talk, I will introduce empirical research exploring the mechanism of audi-

ence effects in musical performance. The methodologies involve measurements of acoustic performance parameters, body movements, electrocardiograms, and the audience's psychological evaluation. The presence of an audience broadly affects the performer's psychological (e.g., state anxiety) and physiological states (e.g., autonomic nervous system). When the performer's psychophysiological state levels, probably modulated by task difficulty, are optimized, the quality of the performance increases due to the presence of an audience.

活動内容：

本研究グループは，人の知覚・認知の仕組みについて，研究することを目標としており，特に，知覚的様相や認知的様相に共通な普遍性とそれらの様相の相互効果によって展開した多様性を現象・行動観察や計算論的解析などを通して明らかにする活動を行うために共同で取り組んでいる。

本年度は，「尤もらしさ感と違和感の知覚・感性・認知科学的機序の解明」を促進するために，2回のシンポジウムで当該分野の国内の第一人者の研究者5名に公演を依頼し，参加者による活発な議論とともに盛況に終わった。

2022/12/05

（文責　吉澤達也）

学びの見える化

⑴　研究会の趣旨

これまで専門職の人材育成の見える化を行い，教育・学習のあり方や体系化を検討する研究会を実施してきた。今年度は，これまでの研究成果を「人文学研究所叢書』の出版に向けた編集作業及び発行を行うことを主たる事業とした。

⑵　研究メンバーと担当箇所（☆人文学研究所研究員及び客員研究員）

○編集委員

齊藤ゆか（神奈川大学人間科学部教授）☆第1章，第4章2，3，4，第5章2

森和夫（一般財団法人職業教育開発協会代表理事）☆第1章3，第2章2，4，第3章1，3，第6章2

西村美東士（聖徳大学児童学部元教授・現非常勤講師）☆第2章1，3，第4章5，第6章1

○執筆者

岩堀嘉仁（トヨタ自動車株式会社・車両技術開発部組長）第3章2

高橋陽一（トヨタ自動車株式会社・車両技術開発部チームリーダー）第3章2

松下祥子（医療法人聖心会・かごしま高岡病院・総看護師長）第3章4

安藤めぐみ（株式会社コーエイ・リサーチアンドコンサルティング，コンサルティング事業部教育グループ）☆第3章5

久米篤憲（株式会社PASC代表）☆第4章1

長浜洋二（モジョコンサルティング代表）☆第4章3

山本直輝（公益財団法人ハーモニィセンター理事）第4章4

小桐間徳（神奈川大学理事長付特別審議役）第5章1

大瀬恵子（一宮研伸大学看護学部講師）☆第5章3

鈴木英夫（神奈川大学法学部教授・教職課程／社会）☆第5章4

太田早織（神奈川大学人間科学部助教・教職課程／体育）☆，第5章5

菅沢茂（実践女子大学元教授）☆第5章6

⑶　成果：出版物のタイトル及び目次

○タイトル
『学びの見える化の理論と実際～教育イノベーションにむけて～』
（神奈川大学人文学研究叢書 48）
○目次
〈理論編〉
第 1 章　なぜ，「学びを見える化」するのか
第 2 章　「学びの見える化」モデルの方法論
〈実践編〉
第 3 章　企業における「学びの見える化」の実践
第 4 章　行政・非営利組織における「学びの見える化」の実践
第 5 章　学校における「学びの見える化」の実践
第 6 章　学びの見える化方法論の課題と展望
⑷　編集委員会の実施程度
月 2 回の編集委員会を実施した。2023 年 3 月中には発行予定。

（文責　齊藤ゆか）

芸術（アート）と物語の交雑／発信力

1. 講演会・研究会の開催
第 1 回研究会
開催日：2022 年 8 月 23 日
会　場：ZOOM 開催
講演者：藤井光氏（現代美術家）
演　題：〈続〉日本の戦争美術
第 2 回研究会
開催日：2023 年 2 月 20 日（予定）
会　場：ZOOM 開催
講演者：藤澤茜氏（本学国際日本学部）
演　題：（未定）

活動内容
本研究グループは，2020 年秋に結成したもので，今年度は 3 年目となる。今年度中の活動としては，各自が研究会テーマに即した活動を個々に進めつつ，問題関心をすりあわせていった。なお，全体の活動としては，上記 2 回の講演会を催し，戦争画をめぐる近代／現代美術および浮世絵について，具体的な題材を元に，社会と芸術の関係について知見を広めることができた。

（文責　松本和也）

おとぎ話文化研究

今年度はメンバー各自がおとぎ話文化に関する研究調査と研究成果の公表を行い，互いの研究内容についての意見交換を継続的に行うと同時に，以下のイベントを企画し，開催した。
1. 人文学研究所主催シンポジウム「Literature Goes to School　教室の中の文学 ― 明治・大正期を中心に」

日　時：2022 年 9 月 3 日（土）14：00–16：30
場　所：神奈川大学みなとみらいキャンパス 米田吉盛記念ホール（オンライン併用）
登壇者（敬称略）：メレック・オータバシ（サイモン・フレイザー大学／神奈川大学），柿本真代（京都華頂大学），宮路大朗（早稲田大学），加藤節子（東京子ども図書館），鈴木宏枝（神奈川大学，本共同研究グループメンバー），村井まや子（神奈川大学，本共同研究グループ代表）

2. 神奈川大学国際交流事業「Storied Environments 物語る環境」
日　時
シンポジウム：2022 年 10 月 15 日（土）10：00–16：00
映画上映会＋トーク：10 月 16 日（日）10：00–18：00
展　示：10 月 14 日（金）～10 月 28 日（金）
場　所：神奈川大学みなとみらいキャンパス　米田吉盛記念ホール（オンライン併用）
登壇者（敬称略）：John Parham（ウスター大学），Desdemona McCannon（ウスター大学），Manuela Adreani（挿絵画家），章夢奇（映画監督），V. Geetha（タラブックス），諏訪敦彦（映画監督，東京藝術大学），山城知佳子（映像作家，東京藝術大学），秋山珠子（神奈川大学），アレハンドロ・モラレス・ラマ（神奈川大学），大和田正人（神奈川大学），村井まや子

なお，上記シンポジウムと映画上映会の講演の一部を『神奈川大学評論』102 号（2023 年 3 月刊行予定）の小特集「物語る環境」として出版する予定である。

3. オーストラリア政府豪日交流基金助成イベント「Festival of the Fantastic」
1. Fairy-Tale Video Art by Fuyuhiko Takata: Screening and Conversation with Fuyuhiko Takata
2. Stitching Wonder: Workshop II with Tomoko Konoike
日　時：2022 年 11 月 19 日（土）14：00–16：00，17：00–19：00
場　所：神奈川大学みなとみらいキャンパス 5008 教室（オンライン併用）
登壇者：高田冬彦（アーティスト），鴻池朋子（アーティスト），村井まや子

上記に加えて 2023 年 3 月 11 日（土）に，本共同研究グループに所属する人文学研究所客員研究員の中脇初枝氏の再話と編集による『世界の女の子の昔話』（偕成社）の刊行を記念して，「『世界の女の子の昔話』を読む会」を本学で開催する予定である。

（文責　村井まや子）

神奈川の地域と文化

本研究は，横浜をはじめとする神奈川県のさまざまな地域の文化・歴史・民俗・地理・観光の諸相について，本学に集う様々な領域（観光学，考古学，地理学，民俗学，歴史学など）の研究者たちが集い，それぞれの強みを活かしつつ他の領域の手法からも刺激を受けながら，学際的に探究していくことを目指している。最終的には，本研究の成果を『大学的神奈川ガイド』と題した叢書として出版したうえで，講義・ゼミをはじめとする本学における様々な教育機会に活かし，人文学に根差した神奈川へのまなざしを神大生のアイデンティティーのなかに根付かせることを目指すものである。

コロナ禍により第 1 回研究会は対面ではなくオンライン（Zoom）での開催となったが，第 2 回研究会はみなとみらいキャンパスでの教室と Zoom とのハイブリッド形式で開催することができた。

民俗学・地理学・歴史学・観光学といった学内の様々なディシプリンの研究者たちに，さらに学外から各トピックの第一人者の研究者も客員所員として加わり，活発な議論が展開されつつある。

以下，本年度に開催した研究会活動を箇条書きで記す。

⑴　第 1 回研究会

◎日時：2022 年 4 月 27 日
◎形式：zoom 会議
◎内容：各メンバーの自己紹介，および執筆予定のテーマについて報告
⑵　第 2 回研究会
◎日時：2022 年 9 月 18～19 日
◎形式：ハイブリッド（みなとみらいキャンパス教室＋Zoom）
◎内容：各メンバーから，執筆内容の進捗状況について報告
⑶　第 3 回（予定）
◎日時：2023 年 3 月 28 日
◎会場：みなとみらいキャンパス教室
◎内容：各メンバーから，執筆内容の進捗状況について報告

（文責　平山昇）

観光と美術

1. 研究会の開催
第 1 回研究会
開催日：2022 年 5 月 30 日（月）
会　場：カフェベローチェ横浜関内
参加者：島川崇，角山朋子，クインタナ・シェラー，増子美穂
検討内容：本研究グループを立ち上げるにあたって，観光と美術の関係性について，研究員同士の意見交換を実施した。
第 2 回研究会
開催日：2023 年 1 月 23 日（月）
会　場：MMC 11 階教員ラウンジ
参加者：島川崇，角山朋子，クインタナ・シェラー，増子美穂
検討内容：「観光資源」に代わりうる用語の検討，急進的環境団体の美術館・美術品への毀損に対する抗議の声明の検討。
2. シンポジウムの開催
「デザインミュージアムのヴィジョン」
開催日：2022 年 7 月 9 日（土）
会　場：MMC 米田吉盛記念講堂
登壇者：暮沢剛巳（東京工科大学デザイン学部教授）
太刀川英輔（JIDA 理事長／NOSIGNER 代表）
花井久穂（東京国立近代美術館主任研究員）
深川雅文（インディペンデント・キュレーター／クリティック）
横山いくこ（リード・キュレーター デザイン＆建築部門　M＋香港）
MC 角山朋子（デザイン史学研究会代表，神奈川大学国際日本学部准教授）
内　容：2022 年，デザイナー三宅一生の国立デザインミュージアム設立宣言から 10 年を経て，あらためてデザインミュージアムの現在と未来の可能性を考える。

近年，人びとの生活にかかわるデザイン，工芸，プロダクトなどをテーマとする展覧会が増えているが，日本にはいまだ国立のデザインミュージアムは存在しない。デザインをミュージアムの領域にいか

に組み込んでいくのかという課題，そして日本でのデザインミュージアムのあり方についての議論をさらに推進するために，研究者，キュレーター，デザイン関係者によるトークとパネルディスカッションを実施した。なお，本シンポジウムが実施されたことについて，NHK，国立新美術館主催「DESIGN MUSEUM JAPAN 集めてつなごう日本のデザイン」（国立新美術館，会期 2022/11/30～12/19）の関連年表に記載された。

3. 活動内容

本年度は，研究グループ発足に際し，この新しい研究分野を開拓するにあたり，それぞれの研究員の問題意識の共有からスタートしている。また，デザイン史学研究会と共催でシンポジウム「デザインミュージアムのヴィジョン」を開催することができたことは大きな収穫であった。これらのディスカッションを通して，2023 年度または 2024 年度に叢書を執筆したいと考えている。

（文責　島川崇）

言語景観と多文化共生

本研究グループは，2020～2022 年度の学内共同研究奨励助成金を受け，「多文化共生社会の言語景観 ── 観光立国日本の多言語表示と情報発信を再考する ──」という研究課題にとりくんでいる。2022 年度は下記第 1 回研究会で各メンバーの問題意識や今後の方向性を報告・検討することから研究活動を開始した。その後，毎月の研究会を継続的に開催しながら，年度後半からは，コロナ禍で予定どおりにいかなかった現地調査を徐々に実施できるようになった。現在は，2024 年度に成果物を刊行する計画のもとで研究活動を展開している。

⑴　研究会の開催

第 1 回研究会

開催日：4 月 28 日（木）19：00～21：30

会　場：Zoom

発表者：李忠均（本学国際日本学部教員）

テーマ：京都市・大阪市における言語景観 ── 韓国語を中心に ──

第 2 回研究会

開催日：5 月 26 日（木）19：00～21：30

会　場：Zoom

発表者：尹亭仁（本学国際日本学部教員）

テーマ 1：近年刊行書籍に見る言語景観研究の動向

テーマ 2：日本の言語景観にみる韓国語表示の諸相

第 3 回研究会

開催日：6 月 30 日（木）19：00～21：30

会　場：Zoom

発表者：佐藤梓（本学経営学部教員）

テーマ：公園の言語景観から【日本語のみの表示】の課題を検討する
── プレ調査の報告 ──

第 4 回研究会

開催日：7 月 29 日（木）19：00～21：30

会　場：Zoom

発表者 1：鈴木幸子（本学国際日本学部教員）

テーマ 1：ポライトネス理論の観点から考える情報発信 ── 警告，注意，依頼 ──
発表者 2：羽場久美子（本学国際日本学部教員）
テーマ 2：少子高齢化と多文化共生 ── 移民・難民：あなたはどうすべきか？ ──
第 5 回研究会
開催日：8 月 12 日（金）17：00～19：30
会　場：Zoom
発表者 1：由川美音（本学外国語学部教員）
テーマ 1：観光案内所の言語景観について
発表者 2：高木南欧子（本学国際日本学部教員）
テーマ 2：キャンパスにおける留学生の言語景観
第 6 回研究会
開催日：8 月 29 日（月）17：00～19：30
会　場：Zoom
発表者 1：小林潔（本学国際日本学部教員）
テーマ 1：ロシア語・ウクライナ語をめぐる最近の動向について
発表者 2：鈴木慶夏（本学外国語学部教員）
テーマ 2：中国語パンフレットの情報提供から考える観光行動の支援方法
── 北海道の地域特性・中国語の表記特性・中国語圏の社会事情との関連で ──
第 7 回研究会
開催日：9 月 16 日（金）17：00～19：30
会　場：Zoom
発表者 1：李忠均（本学国際日本学部教員）
テーマ 1：日本語のハングル表記 ── 現状と問題点 ──
発表者 2：尹亭仁（本学国際日本学部教員）
テーマ 2：ソウルの言語景観・2022 ── 日本における韓国語教育に役立てる取り組みを模索して ──
第 8 回研究会
開催日：9 月 29 日（木）17：00～19：30
会　場：Zoom
発表者 1：鈴木幸子（本学国際日本学部教員）
テーマ 1：観光から多文化共存へと発展した町，ニセコ
発表者 2：由川美音（本学外国語学部教員）
テーマ 2：古都 3 都市の言語景観観察記 ── 訪日外国人の視点から ──
第 9 回研究会
開催日：10 月 28 日 19：00～21：30
会　場：Zoom
発表者 1：高木南欧子（本学国際日本学部教員）
テーマ 1：キャンパスにおける留学生の言語景観 3 ── 北海道大学出張報告 ──
発表者 2：羽場久美子（本学国際日本学部教員）
テーマ 2：沖縄をハブとし，東アジアの平和ネットワークづくり ── 戦争にならないために ──
第 10 回研究会
開催日：1 月 26 日（木）17：00～19：30
会　場：Zoom

発表者 1：尹亭仁（本学国際日本学部教員）
テーマ 1：中国における言語景観と多言語表示 ── 北京・重慶・成都を中心に ──
発表者 2：佐藤梓（本学経営学部教員）
テーマ 2：公園施設の言語景観から「日本語のみの表示」の課題を検討する ── 札幌・弘前・名古屋の調査から ──

第 11 回研究会（予定）
開催日：2 月 27 日（月）17：00～19：30
会　場：Zoom
発表者 1：鈴木幸子（本学国際日本学部教員）
テーマ 1：（仮）東南アジアの観光地で見られる英語表現の比較 ── 行為を促す表現を支えるポライトネス・ストラテジ ──
発表者 2：鈴木慶夏（本学外国語学部教員）
テーマ 2：（仮）多文化共生の光と影
── 対外的知名度向上がもたらす観光リピーターと地元住民への影響 ──

第 12 回研究会（予定）
開催日：3 月 27 日（月）17：00～19：30
会　場：Zoom
内容協議中

⑵　海外調査
- 尹亭仁：2022 年 7 月 17 日（月）～7 月 22 日（金）
  ［ソウルの言語景観と多言語表示の調査］
- 李忠均：2022 年 8 月 23 日～9 月 1 日
  韓国（ソウル市・慶州市）の言語景観調査
- 尹亭仁：2023 年 1 月 2 日（月）～1 月 6 日（金）
  ［重慶・成都の言語景観と多言語表示の調査］
- 佐藤梓：2023 年 2 月 20 日～3 月 1 日
  メキシコ国立自治大学，メキシコシティ及びモンテレイ市の言語景観調査
- 鈴木幸子：2023 年 2 月 20 日～2 月 24 日
  タイ王国・バンコク市の観光英語・言語景観の調査
- 高木南欧子：2023 年 2 月 20 日（月）～2 月 25 日（土）
  メキシコ［メキシコ国立自治大学における言語景観のグランドデザイン］
- 尹亭仁：2023 年 2 月 23 日（木）～2 月 26 日（日）（予定）
  ［上海の言語景観と多言語表示の調査］
- 李忠均：2023 年 2 月 23 日～3 月 1 日（予定）
  ［韓国の言語景観・多文化共生の調査］
- 鈴木幸子：2023 年 3 月 13 日～3 月 16 日
  シンガポール・シンガポール市の観光英語・言語景観調査

⑶　国内調査
鈴木慶夏：2022 年 8 月 12 日～8 月 16 日
［北海道の言語景観調査］
高木南欧子：2022 年 8 月 25 日（木）～8 月 26 日（金）
北海道大学［観光地におけるキャンパスの言語景観］

佐藤梓：2022 年 10 月 27 日～10 月 30 日
［北海道大学，札幌市及び苫小牧市の言語景観調査］
佐藤梓：2022 年 12 月 20 日～12 月 21 日
［弘前大学及び弘前市の言語景観調査］
鈴木慶夏：2023 年 1 月 18 日～1 月 21 日
［北海道の言語景観調査］
鈴木幸子：2023 年 3 月 7 日～3 月 9 日（予定）
神戸市の言語景観調査

(4)　講演会の開催
開催日：6 月 24 日（金）15：20～16：50
会　場：本学・Zoom
演　題：これからのインバウンド観光の見通しと JNTO の戦略
講演者：蔵持京治氏（JNTO 理事）

開催日：11 月 25 日（木）17：10～18：50
会　場：Zoom
演　題：コロナ禍以降のアメリカ，ドイツ，イギリスの言語景観 ── 日本の言語景観との比較 ──
講演者：齋藤葵氏（本学卒業生，ノースウェスタン大学大学院博士課程）

開催日：12 月 6 日（火）15：20～16：50
会　場：本学・Zoom
演　題：多文化共生都市 ── 神戸 ──
講演者：曹英生氏（南京町商店街振興組合理事長）

(5)　研究成果
尹亭仁（2023）「日本の多言語表示にみる日中韓 3 言語の共通漢語」『人文学研究所報』69　pp. 1-21　神奈川大学人文学研究所

（文責　鈴木慶夏）

国際日本研究

1. 講演会・研究会の開催

第 1 回講演
開催日：2022 年 6 月 29 日（水）
会　場：MMC 4020 と Zoom
発表者（所属）：ウェルカー・ジェームズ（国際日本学部 国際文化交流学科）
司　会：シェラー・クインタナ（国際日本学部 国際文化交流学科）
演　題：Queer Transfigurations: Boys Love Media in Asia（Hybrid Book Launch）

第 2 回講演
開催日：2023 年 1 月 18 日（水）
会　場：MMC 4020
発表者（所属）：コウオジェイ・マグダレナ（東洋英和女学院大学 国際社会学部国際コミュニケーション学科）

司　会：シェラー・クインタナ（国際日本学部 国際文化交流学科）
演　題：Imperial Art Audiences
第 1 回研究会
開催日：2022 年 10 月 26 日（水）
会　場：Zoom
発表者（所属）：知花愛実（経営学部 国際経営学科）
演　題：Re-claiming Farmscapes: Indigenous Resurgence in Commercial Farming in Okinawa
第 2 回研究会
開催日：2022 年 11 月 23 日（水）
会　場：MMC 16023 と Zoom
発表者（所属）：ヘーブ・ステファン（国際日本学部 国際文化交流学科）
演　題：A “Civilization-based” Approach to Learning Western Languages for Japanese-speakers: What Future for the “西欧言語を一括で学ぶ” -Project?

2. シンポジウムの開催
なし

3. 活動内容
2022 年度は国際日本研究グループの 1 年目であった。活動を前期の途中から開始し，研究会・講演会を 4 回開催した。今年度は，会員二人が進行中の論文を発表し，フィードバックを得ることができた。来年度からは，前後期にそれぞれ 3〜4 回集まる予定である。

（文責　ウェルカー・ジェームズ）